男女について考える

「女だから無理よ。唯夏、本当に一人で行くつもりなの？」

「女なんてほとんどいないんだから、やめた方がいいんじゃない？」

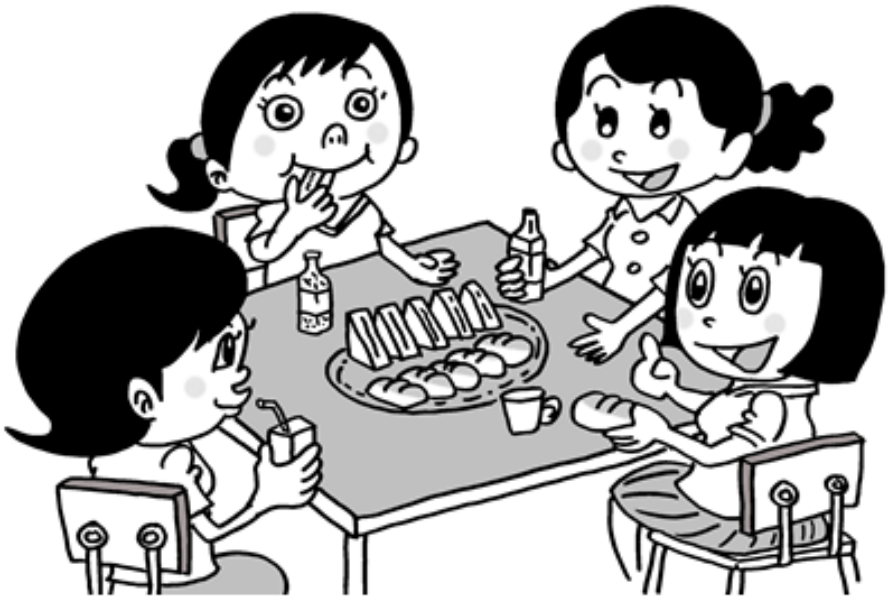
「男ばっかりだと思うよ。力仕事や厳しい訓練は、女には無理よ。」

これは、ある日私が友達から言われた言葉だ。

私は、一学期の終わりに自衛隊への体験入学の募集を知った。私は、早速、友達に参加してみたいということを相談した。すると、友達は私の話を半分も聞かないうちに反対したのだ。

私は、友達の言葉をきいているうちに嫌気がさしてきた。そういえば、最近、女性の人権問題がよく話題になっている。私は、「女だから……。」という理由でつらい思いをしてきた人の気持ちが、少し分かったような気がした。女だから諦めないといけないのだろうか。私は、だんだんと腹が立ってきた。

「いろいろな職業を知って、これからの自分の進路に役立てたいだけなのに……。どうして、こんなに反対されなければいけないのか。」



帰り道も「女だから……。」という友達の言葉が脳裏からから離れなかった。しかし、先生から聞いた説明を思い返すうちに、自分の中で関心や好奇心が大きくなっていった。確かに、私自身も友達と同じように、自衛隊といえば男性が圧倒的に多く、数少ない女性たちが陰で働いているようなイメージをもっていた。それに、その活動の様子をテレビで見たときに、映っているのはすべて男性だったこともあり、女性が働ける場所とは感じられなかった。「やっぱり参加してみたい。」それは、私のすなおな感情だった。

私を悩ませているもの、それは「固定的性別役割分担意識」というものだ。「男は外で働き、女性は家にいて家族のために掃除や洗濯といった家事をするものである。」「男性は主要な仕事をし、女性は補助的な仕事をするものだ。」という意識のことだ。このことを知ったとき、「そんな考えは古くさいし、今の時代では考えられない。」と思った。しかし、私の中にも「固定的性別役割分担意識」があるような気がした。だから「女だから……。」と言われ、腹立たしさは感じたけれども、その言葉を振り切ってまで、突き進んでいくことができなかったのではないだろうか。私自身も性別による偏見をもっていたのだ。

私は家に帰っても、どうしたらよいのか悩み、だんだん自分の気持ちが分からなくなっていった。そこで、母に思い切って自分の悩みを伝えた。母は、じっくりと私の話を聞いてくれた。私は、話しながらも、心の中で、「お母さんも友達と同じように反対するだろう。」と思っていた。だから、母が「自分が行きたいなら、行っておいで。」と言ってくれたとき、思わず母の顔をじっと見つめてしまった。私は、母のその言葉で、自衛隊の体験入学に参加することを決意した。

夏休みに入り、二泊三日の体験入学の日がやってきた。とにかく緊張でいっぱいの私だったが、その気持ちは、現地についた瞬間、あっという間に消え去っていた。参加者は全員で十八人。そのうち、女性は六人いた。行進練習や敬礼の練習、朝礼の行い方や管制塔の見学、航空機の搭乗など、私にとってとても貴重な体験をすることができた。

体験中、何もできない私を指導してくださった女性隊員がいた。私は、その女性隊員の仕事ぶりに目を見張った。女性だからといって、男性と違う仕事ではない。危険な仕事や重労働も、当たり前のようにやりこなしている。私は、自然と他の女性隊員の動きにも目を向けるようになっていた。

「すごい！」

私は女性隊員の動きに釘付けになり、何度も心の中でつぶやいた。しっかりと自分の信念をもって活動している女性がたくさんいたのだ。私には、その女性隊員の人たちが、輝いて見えた。

私は、体験活動が終わった後、ある女性隊員に質問をした。

「女性であることで、悩んだことはないのですか。」

その女性隊員は、

「この職場には階級があり、仕事上、男女に関係なく厳しい。それに自分に課せられた責任を自覚して、任務を遂行しなければならない大変さもある。私は、何度も壁にぶつかり、私にはこの職業が向いていないのかな、と思うときもあった。特に、その中でも女性であれば誰もが感じる男女の体力差には、悩んだのよ。男性と共に職務に当たることは、今後も大変なことが多いと思う。だけど、私は、どんなにつらくても諦めないよ。女性だからこそできることもたくさんあるのよ。」と、答えてくれた。